

# 気持ちのいい風

## 「風は生きよという」

金原由佳 (映画ジャーナリスト)

この作品は自主上映という形で、今、日本各地で公開されている。先日、文部科学省が実施する教育映像等審査制度において「少年向き」「青年向き」「成人向き」「家庭向き」の四部門で特別選定作品に認定されたというので、学校や福祉施設でこの映画と出合う人もいられるかもしれない。

タイトルの「風」には大きな意味があり、本作は人工呼吸器を使って暮らす人たちの生活を収めたドキュメンタリーだ。登場する人たちの病気や家庭の事情はそれぞれ異なるが、人工呼吸器が送り込むシューシューという音は同じで、それは彼らが生きていく証でもある。何らかの不具合があつて、その音が聞こえなくなることは、生命の危機を意味する。

こう書くと、重苦しい作品と思われるかもしれないが、実際はまったくその逆で、私は終始気持ちのいい風を浴びている気持ちになった。

登場するのは、医療の世界で



©「風は生きよという」上映実行委員会

は、重度障害者と呼ばれる人たちだ。一九七七年生まれの海老原宏美さんは生後一年半で脊髄性筋萎縮症と診断され、成長した。でも、彼女は三十代の今、介護の力を借りながらも親から

「風は生きよという」

2015年／日本／81分／監督 宍戸大裕／出演 海老原宏美、金子ゆかりほか

配給 「風は生きよという」上映実行委員会

11月以降は大分県や静岡県での上映予定あり。その他詳しい上映予定や、自主上映の申し込みは、公式ホームページ(<http://kazewaikiyotou.jp/>)を。

# Cinema

独立して生きている。車いすでも出かけていき、地域の障害者に関わる権利擁護や相談支援の活動もする。不足しがちなヘルパーに対して、「やりたない人いないよ、面倒くさいよね」と笑いながら、募集のちらしを自ら住宅地を回って、投函し、常に積極的だ。

海老原さんが小学校で講義をする場面があった。ある児童が「どうしてこんな障害を持つちゃったんだろうと思うことがありませんか?」と尋ねると、海老原さんは「今はあんまり思わない。みんなが助けてくれると困らないから」と笑って答えていた。その姿には、人が「共に生きる」ための多くのヒントがあると思う。

私の亡き父は肢体不自由児の施設に勤める医者で、親元から離れて暮らす子どもたちの未来を常に案じていた。今から思えばあの頃、昭和の時代は福祉が手厚かった。その中で子どもたちは集団生活を送っていた。でも、今の流れは違う。この映画を作った宍戸監督も福祉施設で働いた経験を持つ。当事者による福祉の今に触れる一作をぜひ見てほしい。